

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第63号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和61年3月21日



コオリガモ 撮影者 萩 千賀



も く じ

私の探鳥地（名寄公園）	2
鵜川の野鳥	3
萩 千賀さんを偲ぶ	7
さようなら萩さん	7
ガラス越しの鳥の記	8
聞きなしの民話 (1) カラ類	9
真冬のアカハラ	10
探鳥会報告	10
探鳥会案内	11
鳥民だより	12

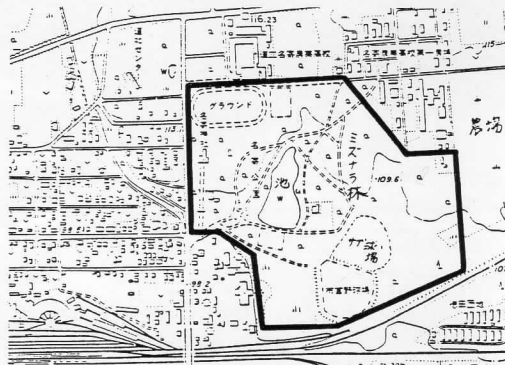
私の探鳥地 ④

名寄公園 松本 光二

8年前のこと、農業高校に赴任して5日目の朝、引越し荷物の片付けもそこそこに「ちょっと、学校まで行って来る。」と、妻の目を掠めるように名寄公園へ出掛けた。そうさせたのは公園の中から聞こえてくる野鳥のさえずりの誘惑によるものだ。4月とはいえ一帯残雪が厚く広がっている。堅雪のところはいいが、そのうち一步步いてはズボッ、一步步いてはズボッと抜かり出す。足元を気にし長靴に入る雪を払いながらの探鳥。最初に出迎えてくれたのはカラ類、コゲラの小さな群、私の不自由さを尻目に軽快に眼前の樹木の芽をついばんでいる。遊歩道に戻って神社の前に出ると、ヤマゲラがミズナラの枯れかけた幹を突ついていた。こんなところにもいるのかと内心驚き眺めていた。それから数分後、近くのトドマツの枝先にベニマシコの番いが現われた。雄の紅色が取り分け鮮明に写った。しばらく枝から枝へ飛び回っていたが寮の方へ飛び去った。いつしかヤマゲラもいなくなった。あちこち歩き回ること約二時間、ベニヒワの群、シメ、ヒヨドリ、アカゲラ、コアカゲラ、ハチジョウツグミ等16種類の野鳥と出会うことができた。充分堪能して家に戻った。その分靴下もたっぷり雪解け水を吸い込んでいた。雪のしたたる靴下とふやけた足を見て妻いわく「学校へは道路がついていないの?」、私がどこへ出掛けたか、最初から判っていたらしい。その年(53年)の6月下旬、幸運にも市営球場入口のシラカバにコアカゲラが営巣し観察することができた。それ以来、私の家から歩いて5分という手軽さもあって公園を私

のフィールドとしている。早朝出勤前の一時間、探鳥散策を楽しんでいる。カラ類とアカゲラは常連で、春から夏にかけては、ムクドリ、コムクドリ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、キビタキ、カッコウ、アオジ、クロツグミ、アカハラ、エゾセンニュウが見られる。秋はハシボソガラスの塙となり、約3000羽が夕暮れ近くに数百羽単位で続々集合してくる様は、見応えがある。冬はアニマルトラッキングを兼ねながらのスキー探鳥、先の常連の鳥の他、シマエナガ、ヒヨドリ、ミヤマカケス、オオアカゲラ、ヤマゲラ、コゲラ、時期によりキレンジャク、アトリ、ベニヒワ、ツグミ、カシラダカ等にも出会うことが出来る。

名寄公園：名寄駅から歩いて15分、市街南東の高台に位置している。小さな人造池があるが、水鳥はほとんど見られない。遊歩道はいろいろあるので、自分の時間に合せて自由に散策できる。隣接する農高農場にはノビタキ、ヒバリ、ハクセキレイ等の草原性の鳥が生息する。



〒096 名寄市緑丘38番地

鵠川の野鳥 1985 (S.60) 秋

羽田 恭子

秋の渡りの季節に、シギやチドリを見に鵠川に行っても、この二、三年は、さっぱりそれらの鳥にはめぐり会えず、鵠川のシギチはもう駄目かと、半ば諦めムードであった。しかし、渡りの季節になると、やはりシギチに会いたくなる。あの清涼な声を一度も耳にしないで、季節が移り変わるのには心残りである。彼等に会うには、札幌からは少々遠いが鵠川しかない。日本海側より、太平洋側の方がシギチの個体数も種類も多いと思う。国鉄運賃が高すぎる。(なんと、札幌から急行で往復 5,000円もするのだ!! そして又、値上げするという。)といいながらも彼等に会いに行った。

行ったから鳥たちに会えたのか、会えるから行くのか、今秋の鵠川は、私にとって“当り”であった。この二、三年の諦めムードも吹き飛び、来年も又、通わなければという気分になった。

これはどう考えればいいのか、繁殖地の条件がよく、多くの若鳥が育ったのか、或は、反対に条件が悪くなり、早々に越冬地へ引き上げてきたのか、又、休息地がなく、つまり、今まであった近くの干潟状の處が失われて、鵠川に集ったのか、そうなら喜んでばかりもいられない。考えてみても、推測の域を出ないのだが。……今日は、どんな鳥に出会えるかという期待感。初めての種に出会った時の緊張感と興奮。潮風に吹かれながら帰路につく時の、満足感。充実感。やはりシギチを見るのは楽しい。

8月17日から10月25日まで20回観察したが、9月末は、室蘭のワシタカの渡りを見に行き、10月前半は、伊良湖岬や戸隠へ、又、11月も東北伊豆沼の雁を見に行き、鵠川にはご無沙汰。今秋は最後まで見届けたい。せめて、11月半ば頃まではと思っていたのに、中途半端に終わっ

てしまった。ハマシギなどは、これから個体数が増えると思われるのに、残念ながら最後はわからない。

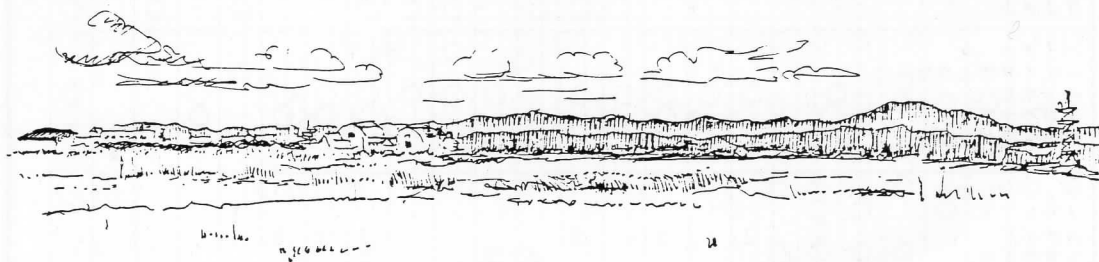
それにしても、シギチの渡りのコースはどうなっているのだろうか。道東風連では8月の初めに、千葉新浜でも8月半ばには、何百というキアシシギの声で、沸き返り、ピークに達するというのに、鵠川では何百というキアシシギは見ることがない。たぶん、道東から一気に関東地方へ飛ぶのだろう。鵠川でたまに見る1、2羽のキアシシギは、落ちこぼれか? この鳥は、シベリア東北部で繁殖したものが、日本の干潟で休み、赤道を超えて、大スンダ列島や、オーストラリア沿岸で越冬するという。鳥にとっては、危険いっぱい命がけの大旅行も、私には、ただ驚異であり、一大ロマンなのである。

この秋の鵠川では、別表のように、23科84種の野鳥を観察した。そのうちチドリ目は、5科36種。シギチが多いと、それらを追って、ワシタカの類もよく現れる。ワシタカ科、ハヤブサ科の鳥は9種観察した。特に、コショウゲンボウ♀は、鵠川では、初めての観察であった。このほか、鵠川で私が初めて記録したものに、ミヤコドリと、ヒメハマシギがある。珍鳥、迷鳥といわれる稀少種だけがよいわけではないが、それらにも“会いたい、見たい”のが、ホンネである。

広い牧場、干潟なので、見逃していることも多いと思われるが、今秋の記録が、何かの参考になれば幸いである。

以下、二三の種について。

・コモンシギ 9月3日と4日にみたコモンシギは、両日共、エリマキシギ♀と行動を共にしていた。以前鵠川で(1982年9月)見た時は、ムナグロと一緒にあった。この秋、9月半ば宮城県で、その後愛知県でも、コモン



1985. 9. 19. 鵠川. 海岸にワシタカとシギ

シギが観察されたという。たぶん、鵠川で私が見たのと、同じ個体ではないかと思う。コモンシギは、北アメリカ北部で繁殖し、南アメリカ、アルゼンチンの辺りで越冬するという。渡りのコースを大きくはずれ、日本でも記録の少ないこの鳥が、鵠川では二度も観察されたのである。

・ミヤコドリ 鵠川では初めて観察した。嘴の先が少し黒く、若い個体と思われた。干潟で二時間以上ゆっくりと採餌をしていたが、オオタカが飛来。他のシギと共に一斉に飛び立ち、海岸側に逃げて、その後姿をみせなかった。9月に鵠川で撮影された2羽のミヤコドリの写真(嶋田忠氏)を、その後みたので、同じ頃何羽かいたのかもしれないが、私が見たのは一羽だけであった。

・ヒメハマシギ 鵠川で初めての観察。砂状の干潟にいた。トウネンと共にいたので、体の大きさは同じ位で、嘴が長く、比較できてよかった。この時は距離も近かったが、遠くにヒメハマシギ一羽だけなら、嘴をみて、あ

あ、ハマシギかで終わったかもしれない。

9月15日には、カラフトアオアシシギもいたという。アオアシシギのなかで、背の低いのがいたが、私は、あそこは水が深いのだろうと、あまり注意深く見なかったの、見逃したようだ。

春のシギの方が夏羽で色が美しく、鳥の種類や個体数も秋とは異なる。例えば春は、キョウジョシギやアカエリヒレアシシギの、何百、何千という大群に遭遇することがある。しかし秋は、この2種について、そんな大群はみえていない。これ等を考えても興味があるが、鵠川の4、5月は、まだまだ寒く、真冬並みの防寒の用意がいる。それにこの季節は山野の夏鳥たちも次々と姿を見せるので、山野での探鳥も忙しくなり、春はどうしても、鵠川通いの回数が少なくなる。

しかし、85年秋で、大いに気をよくしたので、86年春、そして秋も、せいぜい鵠川に通って見たい。

鵠川 1985 (S60) 秋

月		8					9										10					
日		17	23	25	29	30	2	3	4	6	9	13	15	16	19	25	26	2	16	18	25	
種 名		天候	くもり	晴	晴	雨	くもり後雨	晴	晴	くもり	晴	晴後くもり	晴	晴	晴	くもり	くもり後小雨	晴	晴強風	くもり	晴	晴
アカエリカイツブリ アマサギ アオサギ マガモ カルガモ		○ ○ ○ ○	○ ○	○ ○	○		○ ○	○ ○ ○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○ ○	○ ○	○		
コガモ ヨシガモ オナガガモ シマアジ ハンビロガモ					○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○	○	○	○	○ ○	○ ○	○	○	○	○ ○	○ ○	○	○	
スズガモ ウミアイサ ミサゴ トビ オオタカ		○	○	○	○	○	○	○ ○	○ ○	○	○ ○	○ ○	○ ○	○	○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
ハイトカ ハイイロチュウヒ チュウヒ チゴハヤブサ コチュウゲンボウ		○		○	○	○ ○	○	○		○ ○	○	○ (○)	○ ○	○ ○	○ ○	○	○ ○			○ ♀	○	
チョウゲンボウ ミヤコドリ コチドリ シロチドリ メダイチドリ				1 2		2		2 15	2 31	2 42	2 35	13	20	1 10+	1 15	3 40+	1 50+	1 50+	1	9	10	

月	8					9										10				
日	17	23	25	29	30	2	3	4	6	9	13	15	16	19	25	26	2	16	18	25
天候	くもり	晴	晴	雨	くもり後雨	晴	晴	くもり	晴	晴後くもり	晴	晴	晴	くもり	くもり後小雨	晴	晴強風	くもり	晴	晴
種名																				
ムナグロ	66	60+	60±	60±	50±4	5	7	1	15		2	10+2	21	38	23	10+9				3
ダイセン							1	1	1	1	1	2	2	4	3	19	16	16	20+	
キョウジョシギ						1	8	1	1		(1)									
ヒメハマシギ																				
トウネン		1		1	4	20±	22	35	26	9	19	6	18+	30+	14	15+	13	1	2	1
ヒバリシギ		11	5	8	5	1			1											
オジロトウネン												1								
ウズラシギ							2	8	14	4	5	5	13+1	30+	38	30+	70+	120+	120+	500±
ハマシギ																				
サルハマシギ						3	1	4	3			2								
コオバンシギ							12	2	3		2	3	1							
オバンシギ						2	2	10	4		14		1	2		17		2	1	1
ミユバンシギ									7	3	1									
ヘラシギ									1			1	1	1	1	3	5	1		
エリマキンシギ				1		1	1	2		1		1	1	1						
コモンシギ							12	15	4	1	1	1	1	5	3	1				
キリアイ						1	2	5	15			2	3							
ツルシギ									4		1	2	3		2	4				
アカアシシギ																				
アオアシシギ			13	3	7	20±	15	18	20+	31	6	8	7	5	4	7	2	1	6	1
タカブシギ	1	1	1		2	14	10	3	1	2	1									
キアシシギ					1							1								
イソシギ			1		1	1	1		1	3			1							
ソリハシギ					3	5	5	10	5	5	2	2	2	1	1					
オグロシギ						11	10	9	13	17	22	13	12	12	12	12	13	10	10	7
オオソリハシギ						6	12	10	13	12		15								
ホウロクシギ									1	3										
チュウシギ						1	3	1				(1)	3	2	1	2				
タシギ						1	1	1				4	3	2	10	3				
オオジシギ				1	1	1	1	1												
アカエリヒレアシシギ	1													1						
ツバメチドリ	2	3	2				3	1	1	1										
ユリカモメ																				
セグロカモメ																				
オオセグロカモメ																				
シロカモメ																				
カモメ																				
ウミネコ																				
ミツユビカモメ																				
アジサシ																				
キジバト																				
アオバト																				
アマツバメ																				
ヒバリ																				
ショウドウツバメ																				
ツバメ																				
ハクセキレイ																				
タヒバリ																				
モズ																				
ノビタキ																				

月		8					9										10					
日		17	23	25	29	30	2	3	4	6	9	13	15	16	19	25	26	2	16	18	25	
天 候		く も り	晴	晴	雨	く も り 後 雨	晴	晴	く も り	晴	晴 後 く も り	晴	晴	晴	く も り	く も り 後 小 雨	晴	晴 強 風	く も り	晴	晴	
種 名		ホ ア カ オ ジ オ オ カ ワ シ メ	○ ○ ○	○ ○		○	○		○	○	○	○	○ ○ ○	○	○ ○		○		○		○	
		ス ズ ム ハ シ ン ギ SP	○ ○ ○ 3	○ ○ ○	○ ○		○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	
種類数		カ モ ワ シ タ カ SP	24	21	20	18	26	36	41	40	39	31	34	45	36	36	39	35	23	25	○ 26	26
シギチドリの種類数			7	7	7	13	18	21	23	23	15	16	21	18	16	17	14	8	7	7	7	
観 察 者		萩千賀・羽田恭子	羽田恭子	室蘭支部愛護会・約四〇名	萩・土田・村上・羽田	土田・村上・羽田	土田光子・羽田恭子	羽田正男・恭子	羽田正男・恭子	萩千賀・羽田恭子	羽田恭子	柳沢千代子・羽田恭子	愛護会約三〇名	土田・岩本・羽田	羽田正男・恭子	羽田恭子	柳沢・清水・中多・羽田	羽田恭子	羽田恭子	柳沢千代子・羽田恭子	柳沢千代子・羽田恭子	

- ・ シギ、チドリは数を記入
- ・ () は探鳥会解散後にみたもの



〒064 札幌市中央区円山西町3-3-26

萩 千賀さんを偲ぶ

土屋 文男

萩 千賀さんが亡くなられた。通夜は2月11日、建国記念日の夜であった。惜しい人を亡くしたものと僧侶の読経に耳を傾けていると、ウグイスの声を聞いたような気がした。幻聴であろうか。浄土宗（源空によって開立）の総本山、知恩院には「鶯張りの縁」がある。私は数回訪れたことがあったが、あのウグイスの擬音が頭の中で重複したに違いない。

雪嶺院鶴譽千賀大姉の法号が示すように、山を愛し、心から鳥を愛する人であった。

私が初めて彼女に会ったのは、今から30年くらい前であったと思う。道庁の狐政の係長は斉藤さんで、谷口、石田、田中さんなど、今考えれば懐かしい方々が居られた時代であった。私は昭和38年12月15日付で、当時の町村知事から「北海道鳥獣審議会」委員に任命された。22年以上経つ。今のように「バード・ウォッチング」がブームになった時代と違って、当時は唯一のカメラマンであった石田さん（ニコンの長焦点レンズの所持者）や萩さんの情報を頼りにせねばならぬ時代であった。

当時、彼女は登山と山岳写真に夢中で、野鳥の撮影は、ずっと後のことである。

私が札幌市中央保健所長の頃のある日、長兄の方と右近さん（現札幌市衛生局長、萩さんの妹さんの御主人）が顔色を変えて来られたことがあった。ネパールの山で“高山病”にかかって、生命も危険かも知れない。お兄さんが現地に行きたいのだが、『イエロー・ブック』が



58.7.3 福移探鳥会にて（中央が萩氏）

ないと出国できないという。当時は種痘やコレラの予防接種の公的機関の証明書がなければ全く出国を認めなかった時代である。良くないことだが、仕方がないので1週間繰り上げてサインした。暫くして、思ったより元気になるって所長室に挨拶に来られたので、「もう山は止めなさいよ」と余分なことを言ってしまった。それからの野鳥への熱中ぶりは、会員の皆さんのよく知るところ、敢えて、ここでは触れないこととする。しかし、色々な面でお世話になった。何かお願いすると、「ウン」と言って肯き、何時も短くしていた髪が揺れた。今はもうその姿もない。“浄土”で美しい花や鳥にとり囲まれている萩さん、御冥福を心からお祈りする次第である。

〒062 札幌市豊平区福住1条8丁目10-13

さようなら 萩さん

羽田 恭子

大井川のカタジロワシと、木曽川のコウライアイサを見に来ませんか、静岡の鳥友からの電話。受話器を置いて、萩さんも誘わなくてはと思いました。静岡のKさんは、萩さんもお存知の方です。しかし、すぐ、ハッとしました。ああ、萩さんは亡くなられたのだ。もういらっしやらないのに…… そう気付いた時の寂しさ、体の中を冷たい風が吹き抜けていきました。

告別式には、旅行中で参列できず、帰札して五日ばかり前に、お参りしてきたのに、萩さんは今まで通り、私の心の中に生きていたのです。

16年間のお付き合いの中で、何十遍、いや何百遍、行

動を共にしたでしょう。思えば60年9月21、22、23日と、道東へ二人で行ったのが、萩さんとの最後の旅になりました。それから二ヵ月足らずで入院されようとは、あの時すでに、病魔は萩さんに潜んでいたのです。

根室では、前に道庁にいらした梅木さんがご案内して下さいました。枯葉色の秋は、花の色も少なくなっていました。足元に咲く白い小さな、コハマギクでしょうか、に目を止めて、シャッターを切っていた萩さん。霧多布の崖地です。空にはトウゾクカモメが2羽飛んでいました。風連の白鳥台では、何に驚いたのか 160羽ものアオサギが、一斉に舞い立つさまに目を見張り、タン

チョウがゆったりと歩を進める傍を、キタキツネがトコトコと通り過ぎるのを楽しみました。頭上を渡るヒシクイの群れに、萩さんのバンパバンというシャッターの連続音が追いかけてきます。萩さんの後ろには、薄紫のユウゼンギクが色彩を添えていました。遠ざかる雁行を見送る萩さんの満足した笑顔は、秋の風連の風景と共に忘れ難いものになりました。

山を愛し、鳥を愛し、人に愛され、ご家族の手厚い看護の中を旅立たれた萩さん。残念だけれど、萩さんの人生は、幸せだったと思わなければ、とても辛くてたまり

ません。無理にも自分にそう言いかけ、納得させて、絶対に涙は出まいと、2月14日、お参りに行ったのです。にっこり微笑んだ遺影は、私が差し上げたフクロウのループタイをしていました。私は萩さんから頂戴した外国土産のブローチをつけていきました。偶然、お互いのプレゼントを身に付けていたのを見た途端、涙が止めどなく流れました。どうしてこんなことになったの、どうして…… ただただ、ご冥福を祈るばかりです。

〒064 札幌市中央区円山西町3-3-26

ガラス越しの鳥の記

大坊 幸七

ちかごろ、わが小庭にも小鳥たちが、少しずつやってくるようになった。森林や草原が雪に覆われ、しだいに街に餌を求めてくる時季、即ち冬鳥たちが、わが小庭に姿を現わしてくれる。

なすこともない冬の日、居間からガラス越しに眺めていると、小鳥たちにはそれぞれ個性があってなかなかおもしろい。アカエゾに吊した方寸の餌台の真ん中に、「ドンッ」と居すわり、同族のスズメたちが近寄ろうとすると、顔を突き出し一喝する。それに恐れをなして同族は怒り餌台から離れる。居すわる一羽のスズメは、飽食に飽食をかさね飛べないようにも見える。それでもなお、思い出したように餌をたべる。これではまるで兵隊ゴロである。餌を取れないスズメたちが気の毒になって、居間からガラス越しに腕をあげる。ゴロ助をはじめスズメたちは、一斉に飛び去る。この点まことに機敏このうえもない。妙に図々しい一方、危険予知能力の勝れていることが、人類と共に今日まで繁栄をつづけてこられたのであろう。

零戦名パイロットのシジュウカラは、腕前には自信がある。さき程ガラス越しに腕をあげた時も、わずかに枝の一点で方向を変えただけである。再び戻って居すわるゴロ助を、いかに攻略するかその機をしきりに窺っている。ゴロ助に油断があったのか、放たれた矢のように餌台に向かい、サッと餌をかすめ取り、ナナカマドの微細な枝を縫い、足場のよい一番高い枝で、足で押えたヒマワリの中の実を、コソコソと独り味賞する。

春めきを感じる頃、軒先のつららに逆さにとまり、したたる水を飲むシジュウカラは、また、軽業師でもある。

アカゲラは突然やってくる。ゴロ助と同じくらいのところの幹に直接とまる。それから幹の半ばにある脂身めがして登はんする。てんでゴロ助など念頭にない。ゴロ

助も格別気を悪くしたふうはない。アカゲラは喰べおわると樹頂をめざして又登はんする。樹頂で、しばらく一方向をみていたが、やがてその方に飛び去る。

アカゲラは、無口で哲学者である。

ツグミ、ヒヨドリになると、さすがに大関同士である。

無暗に小競り合いはしない。冬囲いの竹の先に刺したリンゴをはさんで、上と下で相対じする。ややあってツグミがリンゴに取りつき領土を主張する。これは完全にヒヨドリの「気合い負け」である。判定はツグミの勝ちである。

数年前、家人が一人減ったので、以後二階のそのあとを書斎兼寝室として使用している。ある猛暑の年であった。余りに暑かったので、朝まで窓をあげ放しにして寝ていた。薄明が空に漂いはじめた頃、わが小庭の南に位置する札幌大学の森から、さわやかな冷気とともに、ヨタカのまな板を叩く声が聞こえてきた。又ある朝は、イカルやマミジロの声も聞こえてきた。これは新しい発見と喜びであった。

二階に移り住む以前も、きっとこれらの声は聞こえていたに違いない。

マミジロの声は甘く、時にはもの憂げに、時には「オおきなさいな」と優しく、夢の中の佳人は呼びかける。

こんな時、ほとんど嬉しくなって、床中でその声にきき惚れる。その声も、そのご別な年に聞いたきりで、今は聞こえてこない。二階ではじめてこの声を聞いた時、元家人もこの声を聞いていたのであろうか、一度そのことを聞いてみたいと思いながら、今に至るもまだ尋ねていない。

〒062 札幌市豊平区西岡2条5丁目8-8

聞きなしの民話

(1) カラ類

武沢 和義

花咲爺がバードウォッチャーであったかどうかまでは知らないが、彼が鳥の聞きなしの名手であったことは、ほぼ間違いなく、枯れ木に花を咲かせるためのノウハウなども、小鳥から教わっている。あれだけ有名な話なのに、花咲爺が何と言って灰をまいたかについては、ほとんど知られていない。『枯れ木に花を咲かせましょう』と言うのは、自分を売り込むためのコピーであって、花を咲かせるための作業とは関係がない。

私たちにあって聞きなしは、野鳥の声を覚えるための便利な方法の一つであるが、自然との交流がもっと豊かであった時代には、聞きなしをとうして自然の動きを教わることも多かった。イカルが『ミノカサ(蓑笠)キー』と鳴くと雨が降り、『アケベウ(赤い着物)キー』と鳴けば晴れるという、お天気占いもその一例であろう。鳥はまた、人間に最も親しく声をかけてくれる動物で、とりわけ子供たちは素直にその声に耳を傾けて楽しんでいた。民話には人間のそんな姿がたくさん描かれている。

民話は書きとどめられることなく口から耳へと語り継がれてきたものであるから、途中で誤って伝えられたりして、少しずつ話の内容や表現が変わってきた。その変化の仕方は時代や地方によって異なるので、同じ話やよく似た話を集めてそれらを較べると、話の移り変わりがたを理解できる。例えば『竹伐り爺』、『鳥呑み爺』、『へひり爺』などの一連の話は、元々一つの話であったのが枝分かれしたものである。

『鳥呑み爺』の話の基本的な荒筋は次のようである。昔、山で働いている爺さんがおって、誤って小鳥を呑み込んでしまう。そして腹をなでてみると、ヘソの所から尻尾のようなものが出ていたので、それを引っ張ると、美しい声で面白い歌が聞こえた。そこで殿様にその声をお聞かせして喜ばれ、たくさんの褒美をもらった。

ここで問題にしたいのは、呑み込んだ鳥の種類と聞こえた声がどんなものであったかということである。関敬吾の『日本昔話集成』に五十余例の『鳥呑み爺』の話が収められているのでそれを読んでみた。種類の明らかでない場合(約二十例)を除くと、一番多いのがスズメで十二例あり、次いでシジュウカラやヤマガラのカラ類が九例あった。しかしスズ

メについては『シジュウカラ』と鳴いたなどと首をかしげたくなる例があったり、鳴き声そのものはカラ類と判断できる場合も多かった。ところで柳田国男は、雀が小鳥一般の総称として使われた時代もあり、民話の中ではハタオリドリ科のスズメを指すとは限らないということを描している。そこで鳴き声から判断して、爺さんの呑み込んだ鳥はカラ類の仲間であると考えておきたい。

これらの民話の面白さは、爺さんの腹からでてくる歌声あるいは唱え文句にあり、これがへの音と混同して笑話化したのが『へひり爺』の話である。このような話になるべく面白く語ろうとするので、表現を様々に使いわけようになる。しかし小鳥の声を真似ようとしていること、それにおめでたい祝い言を付け加えようとしていることは、ほとんどの話に共通している。

ヤマガラを呑み込んだ爺さんの場合に聞こえる声は『チチンブイブイ、五葉のおん宝』である。チチンブンブンやチチンブヨブヨなどというのもこれの変形である。さらにシジュウカラカラ、チンチンカラカラあるいはヒュウカラブンブンのようにカラの名を含むものも多く、これらがカラ類の鳴き声の聞きなしになっていることは明らかである。民話の中の唱え言葉は、民話から離れてしばしば日常生活で使われることがある。『チチンブイブイ、五葉のおん宝』というの、子供が泣き出したときにあやす言葉として、江戸時代から使われてきた。ほとんど使われなくなった時期もあったが、近年、テレビの電波に乗ったおかげで、『チチンブイブイ、イタイノイタイノトンデユケ』という形で再び使われるようになり重宝されているようである。

この『鳥呑み爺』の話に『雁取り爺』の話が合流して発展したのが『花咲爺』の昔話である。そして灰をまく時の唱え言葉に『鳥呑み爺』の名残りが認められ『チンパリン、五葉の松』といっている。そればかりか採集された話のなかには『チチンブイブイ、五葉のおん宝』というのも含まれている。

『鳥呑み爺』のような話が生まれる背景には、ヤマガラのような鳥が吉兆や豊の存在を知らせてくれる力を持っているという信仰がある。だからヤマガラのおみくじも、芸を仕込みやすいとか、かわいいというだけではなく、ヤマガラの手ってくるおみくじならば、幸福を約束してくれるという想いがあったに違いないと思う。

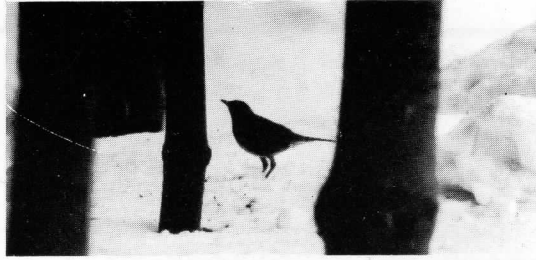
〒064 札幌市中央区南4条西26丁目



真冬のアカハラ

竹内 強

札幌商業高校の庭で、バードテーブルを始めて1週間、スズメ30羽、ヒヨドリ10羽がうちの常連。その中に尾っぽの短いヒヨドリが1羽。「あれ、アカハラじゃないかなあ。」。戸津さんに確かめると「今、この辺にはアカハラはいないはずだよ。」の返事。では、証拠をということで撮った写真です。



札幌市豊平区豊平8条13丁目1-1 辻沢方



ウトナイ湖

60.11.17

松井由紀子

初雪の便りも各地から届き、ナナカマドの赤い実が木枯しに揺れ始めた初冬の日曜の朝、半年ぶりの探鳥会参加です。少しごぶさたしていたせいでもないのですが、肝腎の双眼鏡を忘れたのに気付いた時はすでに一日一本しかないという直通のバスの中でした。気を取り直してバスを降りるとレイクホテルそばの湖畔にはオオハクチョウ、コブハクチョウそしてオナガガモなどが観光客の手からエビセンなどをもらっていたり、団体で岸に上がって大きな水かきでヨタヨタ歩きまわっています。

少し離れた草原の中から探鳥会の始まりです。湖の中間のヨシ原のあたりにマガモ、ヒドリガモ、ウミアイサ、アオサギなどが見られます。アメリカヒドリいるとの声にプロミナをのぞかせていただくと、おでこが白く目のまわりの緑色のカモがいます。好運というか、探鳥会に参加するたびに珍しい鳥たちとの出会いがあります。野幌でのアカショウビン、千歳でのヤマセミ、アオバトそして植苗のシマアオジ、その時その時の感激を思い出します。対岸の背の低い木の枝にはトビとオジロワシもじっと止まっています。できることなら大空をはばたいて欲しいと思うのはぜひたくでしょうか。ホテルの前へ戻って来るとオナガガモの群の中に頭が黄色っぽいのが一羽泳いでいます。図鑑を見るとヒドリガモです。先程遠くで泳いでいたのがこれだったのかとあらためて確認しました。湖の岸沿いに、時々立ち止まり双眼鏡をのぞきながらネイチャーセンターへと歩き始めます。前のグループが立ち止まっている所から何か飛び立ちました。聞いてみるとツルシギがすぐそばにいたそうです。後ろ

の方からバタバタという大きな音がするので振り返るとハクチョウが飛び立とうとしています。すごい羽ばたきの音です。鳴き声といい歩き方といい、優雅な姿に似合わずユーモラスです。覚悟していた程寒くなく、久し振りの探鳥会を楽しむことができましたが、これからは外へ出るのがますます大変になりそうなので、小鳥たちに庭先まで来てもらおうなどとずぼらな事を考えています。昨年の冬、顔なじみになったヒヨドリ、ヤマガラなどが又来てくれるといいのですが。

〒061-21 札幌市南区北ノ沢 1745-78

〔記録された鳥〕 カイツブリ、アオサギ、ヒシクイ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ツルシギ、セグロカモメ、シロカモメ、カモメ、コゲラ、ハクセキレイ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウガラ、スズメ、ハシボソガラス、
以上30種

〔参加者〕 渡辺俊夫、中野高明、武沢和義・佐知子、井上公雄、高倉龍文、青柳伸介、竹内 強、香川 稔、松井 昌、田中金作・礼子、木田恵美、戸津高保・以知子、羽田恭子、佐々木武巳、谷ロー芳・登志、柳沢信雄・千代子、松井由紀子、浪田良三、道川 弘・富美子、堀内 進、三島真知子、和佳、曾根モト、水本久仁子、長谷川涼子
以上31名

〔担当幹事〕 堀内 進、戸津高保

小樽野鳥の会、12月の探鳥会は札幌と合同でマイクロバス2台に乗り込み、10時小樽駅前を出発致しました。一路祝津海岸へと向いました。前浜でバスを降り、水族館の裏の岬での探鳥からはじめました。初めに皆の眼を奪ったのはドド池の中を静かに泳いでいる一羽のミミカイツブリでした。アビと言う声も上がりみんなで視察するうちに、毛並も汚れて濡れ、まぶたに釣針をぶら下げたミミカイツブリと判る、助けてあげたかったのですがどうする事もできず残念でした。雪の降りしきる波間に一羽のウミガラスを発見する、大きな望遠鏡を覗かせてもらう。あまり美しい色ではないけれど波にもまれているウミガラスは私にとって初めての視察でした。心を残しながら、祝津を出発、運河沿いに小樽港のはずれ舞鶴、敦賀行き船待合室へ直行しここにて昼食を取る。午後からは、歩きで第三埠頭までの探鳥となりました。第一埠頭では、雪の降りしきる中でベテランの眼が灯台の近くにコオリガモの群れを発見する、10羽、20羽と港内に陣を作っていました。眼の前を泳ぐウミアイサの雄が2羽、赤い眼が可愛い。雪がますます降り出し皆は望遠鏡にハンカチを被せ、首からかけている。第二埠頭では日曜日荷役のない埠頭内で、ホオジロガモの群れが、90羽、60羽と群れていました。手の届きそうなところで、陣が右へ左へ移動して、遊んでいるとも、会議をしているとも見えました。黄色い眼が印象的。第三埠頭では、港内にハジロカイツブリ4羽を発見、一羽は遊覧船乗場の棧

橋のすぐ近くで潜ったり浮かんだりしてくれました。海のある街ならではの探鳥と思いました。後藤ひろみさんの鳥合せを終え又のお会いを約束して14:30 解散となりました。

〒047 小樽市松ヶ枝2丁目16-3

〔記録された鳥〕 ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ウミネコ、ミツユビカモメ、ウミガラス、ウミスズメ、ハクセキレイ、スズメ、ハンボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、以上22種

〔参加者〕 伊藤玉枝、小泉和枝、後藤ひろみ、志田範三、霜中愛子、末岡 陸、高橋里子・秀実、竹内喜代治、津田新平、釣崎広子、富樫敏雄、中野高明・由美子、奈良田清光・智子、辺見啓子、松山佳則、大和民承、山本茂男、吉村澄子、渡辺俊夫、堀内 進、井上公雄、田中礼子、戸津高保、以知子、竹内 強、谷口登志、曾根モト、松館光雄・弘昌、羽田恭子、黒田晶子、園部恭一、岩泉ゆう子、田辺 至、佐々木武巳、玉山 武、小須田秀子、伊藤恭子、白倉美智子、長谷川涼子、道川 弘・富美子以上45名

〔担当幹事〕 中野高明、渡辺俊夫



〔野幌森林公園〕

昭和61年 5月11日 (日)

夏鳥達も次々と姿をみせています。鳥達が囀り、樹の芽が伸び、花が咲き……、じっとしておれないはず。クロツグミ・センダイムシクイ・ウグイス・ヤブサメ等、30種以上みられるでしょう。

午前9時30分 大沢駐車場入口、または午前8時30分百年記念塔前集合

〔植苗・ウトナイ湖〕

昭和61年 6月15日 (日)

さわやかな初夏の風が吹き抜ける勇払原野の一画です。シマアオジ・オオジュリン・ノビタキなどの草原の鳥達が、アソや灌木の影から飛び出したり、せいっぱい囀ったりしています。オオジシギの豪快な

ディスプレイもみられるでしょう。

午前9時10分 国鉄千歳線植苗駅前集合

〔東米里〕

昭和61年 6月22日 (日)

宅地化が進み、この付近も鳥達にとってますます住みづらくなっています。それでもカッコウが飛び、ノビタキ・コヨシキリなど 草原の鳥達が、私達を喜ばせてくれます。例年、アリスイ・アカモズがみられます。

午前9時 市営バス米里線 東米里小学校前停留所集合

〔夜の野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和61年 6月28日 (土)

初めての試みで(良いもの、悪いものを問わず)何が出てくるかわかりませんが、一度歩いてみませんか。2時間30分位の予定です。懐中電灯をお持ちください。

午後7時 百年記念塔前 集合

〔福移〕

昭和61年7月6日(日)

ここは札幌の郊外 豊平川が石狩川に合流するあたりです。牧草の中を通ったり、堤防の上から眺めたりしながら、ゆっくり歩きたいと思います。ホオジロ・ホオアカ・ベニマシコ・コヨシキリなどの他、ショウドウツバメなどもみられるでしょう。

午前8時30分 市営バス札苗線 福移入口停留所集合
〔森林公園を歩きましょう〕

昭和61年5月25日(日)・6月8日(日)・7月13日(日)
午前9時30分大沢駐車場入口、または午前8時30分百年記念塔前集合

いずれの探鳥会も暴風雨でないかぎり行います。昼食・筆記用具、観察用具をご用意下さい。

探鳥会についてのお問い合わせは、

道川 011-712-3410 まで。

<千歳川周辺一泊早朝探鳥会>

他の探鳥会に比べ、やや歩く距離はありますが、その分次々と鳥達が現われてくれます。(目移りしないように)。昨年、一昨年とも、50種以上みられました。一人だとなかなか早く起きれない方も、この機会にどうぞ御参加下さい。

1. 日時 昭和61年5月17日(土) 午後7時より

18日(日) 午前4時から探鳥開始、午前中解散予定

2. 場所 サンポートガーデン

千歳市蘭越町5番地・電話01232-3-3741

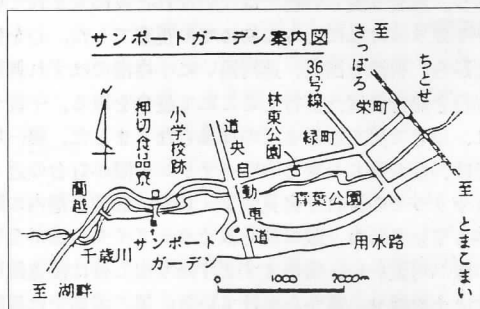
3. 会費 2,000円 夕食付(ジンギス汗鍋)。朝食は各自持参

※宿泊設備がないため(畳の部屋はあります)、寝袋・毛布など御用意下さい。

※自家用車の方は直接サンポートガーデン集合(駐車場あり)

列車・バスの方は国鉄千歳駅待合室・午後6時30分集合。駅から現地まではタクシーを利用します。

※参加申込 4月と5月の野幌森林公園探鳥会の折受付ます。電話の場合5月15・16日(午後7時30分から10時までの間) 電話011-831-8636 戸津高保まで。



◆定例幹事会報告

61年1月8日(水) 18時
30分~20時

札幌市民会館会議室 出席
幹事8名

野鳥だより62号発送、新年懇談会・藤の沢探鳥会の開催について、また61年度幹事会日程についての報告がありました。

◆定例幹事会報告

61年2月5日(水) 18時30分~20時

札幌市民会館会議室出席幹事9名

〔審議内容〕

1. 昭和61年度の探鳥会計画が探鳥会幹事より提案され、検討した結果、千歳1泊探鳥会は従来どおり、初の試みとして夜間の野幌探鳥散策を実施すること等が決まった。

2. 総務幹事より新年懇談会の報告ならびに総会資料作成についての依頼がなされた。

◆定例幹事会報告

61年3月5日(水) 18時30分~20時30分

市民会館会議室 出席幹事8名

〔審議内容〕

1. 4月19日に開催する総会の案内はハガキでお知らせする。

2. 4月3日の幹事会のときに、各担当のチーフは総会資料の原案を持参すること。

3. 探鳥会の年間スケジュール表を別刷りし、3月号に合わせて発送する。

4. 幹事であった、萩 千賀さんがなくなられたので野鳥愛護会の名前で電報を打った。

◆編集部より

野鳥だより60号の鳥学コーナーで「ヒヨドリ」の尾はあとから生えてくる?」を取り上げましたが、あの答につきましては、日本鳥類保護連盟の柳沢紀夫氏によるものです。遅くなりましたがお知らせいたします。

萩 千賀氏

当会幹事の萩千賀さんが2月9日お亡くなりになりました。萩さんは古くからの会員であり、また、幹事として当会のために貢献くださいました。ここに、つつしんでご冥福をお祈り申し上げます。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費1,500円(会計年度4月より)郵便振替 小樽 1-18287
060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465